胸よ大きく

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
胸よ大きく

【Ｎコード】
Ｎ３６９３Ｄ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
胸が小さいと思ってコンプレックスのある素子。彼氏の心を完全に自分のものにする為に必死に努力をして。女の子の魅力は果たして胸だけでそれが大きいだけでしょうか。

第一章

胸よ大きく

宇野素子はとにかく必死だった。このうえなく必死だった。
何故こんなに必死かというとそれには理由があった。彼女にとっては充分な理由だった。
「やっぱり胸なの」
「そうらしいわね」
クラスメイトの影満佐代からある話を紹介されていた。フランスの王様の言葉をだ。
「女はまずそれなんだって」
「胸なの？」
「そう、胸」
彼女は自分の胸と素子の胸を交互に見ながら述べるのであった。
「そこらしいわ、女の全ては」
「そんなこと言われたら」
素子は困った顔になってしまった。見れば白い肌で全身を覆われ黒髪を首のところで切り揃えている。目は垂れ目で小柄な身体と合わさって童顔である。高校生というにはやや幼い感じだがそれでも中々可愛い感じである。容姿的にはそれ程悪くはない。
「私困るわよ」
「困るんだ」
「だって。胸ないのよ」
顔を顰めさせて腕を組んでの言葉であった。
「気にしてるのね」
「素子ってそんなに胸ないかしら」
「ないのよ」
首を傾げる佐代にすぐに言い返す素子だった。
「見てわからないの？」

「全然。自分の以外にはあんまり興味ないわよ」
「グラビアアイドルとか見ていつもへこむのよ」
素子も素子でまた極端な例を持って来た。
「胸ないし。自分もあんなに胸があったらなあって」
「胸欲しいのね」
「勿論よ」
これはもう決まっていた。素子にとっては言うまでもないことであった。
「何があってもね」
「それじゃあ努力してみたら？」
佐代はそれを聞いて何も思っていないような感じでこう言ってきた。
「そんなに大きくしたいんだから」
「そうねえ。努力すれば大きくなるわよね」
素子もそれを聞いてうんうん、と頷くのであった。
「じゃあまずは胸を矯正するブラよね」
「いきなり詳しいわね」
思わず素子に突っ込みを入れた。
「それを出して来るなんて」
「それと牛乳？」
「背が伸びるかもね、ついでに」
「別に背はいいのよ」
素子はそれに関しては特に気にはしなかった。
「それはね」
「私はそっちの方が大事だけれど」
「佐代別に小さくないじゃない」
小さい素子が言うとかなり説得力があった。
「それでなの？」
「もっと欲しいのよ」
佐代は佐代でそうした願望があるのであった。

「もっとね。モデルさんみたいに」
「そこまで高くなってどうするのよ」
「昔から大きくなりたかったのよ」
意外にもそれが彼女の望みであるのだった。
「スラリとしてね。奇麗に」
「何か私と全然違うわね」
素子はそれを聞いてあらためて思うのだった。
「私はやっぱり」
「胸なのね」
「そうよ、高志君だって絶対にそっちの方が好きだし」
素子の彼氏であり小笠原高志である。今時の茶髪の少年である。高校の同級生であり一年の頃からの付き合いなのである。
「だからよ。背はどうでもよくて」
「そんなに言うんだったらブラだけで満足しないことね」
佐代はまた言ってきた。
「いい？肝心なのは」
「肝心なのは」
素子は殆ど無意識のうちに身を乗り出していた。そうして同じく身を乗り出していた佐代の言葉を聞くのだった。
「食べ物よ」
「食べ物なの」
「そう、まずはね」
「ええ」
真剣な顔になっていた。その顔で佐代の話を聞く。
「牛乳を考えるでしょ」
「やっぱりそれじゃないの？」
さっきの話にも出たが胸を大きくするのはやはりそれが一番だというのは定説であった。本当に効果があるかどうかはまた別の問題であるにしろ。
「それだけじゃ駄目よ」

しかし佐代はさらに付け加えるのだった。
「まだね」
「じゃあ他には何が必要なの？」
「キャベツがいいらしいわ」
「キャベツが！？」
素子はそれを聞いて少し素っ頓狂な顔になった。これは意外だった。
「何でも頑張って食べると胸が大きくなるらしいわ」
「へえ」
意外だったがいいことを聞いたと思った。聞けばそれをやってみようと思うのもまた人情である。今の素子も丁度それであった。

第二章

「あと豆乳ね」
「それもいいのね」
「わかったかしら、これで」
「ええ、牛乳とキャベツと豆乳ね」
「あとはそうした運動」
佐代は運動も付け加えてきた。
「それをやっていれば大きくなると思うわ」
「わかったわ、やってみるわ」
素子は佐代の言葉に大きく頷いた。だが佐代はここでまた言うのだった。
「あとね」
「まだあるの？」
「あんた、高志君と何処までいったのよ」
「何処までって」
この問いの意味ははっきりとわかっている。わかっているからこそ素子も顔を顰めさせるのだった。姿勢も少し引いたものになっていた。
「いきなり何よ、そんなこと聞いて」
「関係あるのよ。何処までいったのよ」
「関係あるのね、それ」
「そうよ。だから言って」
ここまで言われると言うしかなかった。素子も恥ずかしいがそれでも胸を大きくする為には。清水寺の舞台か極楽寺屋根上から飛び降りるつもりで答えたのだった。
「してるわよ」
「そこまでいっていたのね」
「ええ、そうよ」

顔を真っ赤にさせて答える。白い顔がもう桜色になっていた。
「そうよ。はい、言ったわよ」
言い終えてぶしつけになっていた。
「ちゃんとね。これでいいのよね」
「いいわ。成程ね」
佐代はニヤニヤしていた。素子の秘密がわかって嬉しいようにも見える。素子はそれがまたとても嫌だったが言ってしまったからには仕方がなかった。
「高志君も隅に置けないっていうか。大人しい顔をして」
「あんたもでしょっ」
素子も佐代に彼氏がいることは知っているので思わず言い返した。
「それも相手中学生じゃない。子供に何してるのよ」
「男はやっぱり年下よねえ」
それが佐代の趣味であった。うっとりとさえしている佐代であった。
「色々と手取り足取り教えてあげるのがいいのよ」
「変態！？あんた」
素子はそれを聞いて思わず言い返した。
「それって」
「そうかしら。自覚はないわよ」
佐代は素子の言葉にも平然としたものであった。しれっとして言い返す。
「変態だなんて」
「中学生にいけないこと色々と教え込んでいて？」
「言っておくけれど押し倒されたのは私よ」
何気にとんでもないことを口にする。
「わかる？向こうから仕掛けてきたのよ」
「そう仕向けることはできるわよね」
それがわからない素子でもない。こんなことは恋愛では基礎の基礎である。

「そうでしょ」
「あら、じゃあ私が仕掛けたっていうのかしら」
「その通りよ」
素子はそれもまたはっきりと述べてきた。
「それ以外に考えられないわよ、あんただから」
「言っておくけれどね」
佐代もいい加減むっとしたのか言い返してきた。真剣な顔になっている。
「私だってはじめてだったのよ」
「えっ！？」
「あんただって高志君がはじめてだったわよね」
「ちょ、ちょっと」
話がかなり危なくなってきたので慌ててクラスを見回す。幸い話は誰も聞いてはいないようであった。素子はそれにまず安心してから佐代に顔を戻して言った。
「声が大きいわよ」
「おっと、失礼」
「失礼よ。それはね」
「どうなの？」
小声になっても話を続ける。ひそひそと顔を寄り合わせての話になっている。
「その通りよ」
「何だ、じゃあ同じじゃない」
「同じだけれど。じゃああんたやっぱり」
「勇気がいったわ」
この言葉が全てを言い表していた。
「彼も中々乗らなかったし」
「やっぱりそうなの。こっちもなのよ」
何と素子も高志もそうであったのだった。
「高志君も奥手だから」

「やっぱりね。そんな感じはするわ」
それには佐代も頷くことができた。
「だからよ。そこまでいくのに苦労したのよ」
「それで今度はもっと苦労するつもりなの」
「ええ、そういうこと」
話が胸に戻る。そうしてまたそれについて話をするのだった。
「大きくしたいからね」
「高志君って胸が大きいのが好きなんだ」
「だから。それは男なら誰でもそうなのよ」
素子はそれを信じて疑わないようであった。それが顔にもはっきりと出ていた。しかしそれだけではなく彼女は何かに焦っていた。焦っているのもまた顔に出ていた。
「だからよ。頑張ってみるわ」
「じゃあ頑張ってね」
佐代は何か引っ掛かるものがあったがそれを応援することにした。
「気合入れてね」
「目指すは川村ひかるさんよ」
グラビアアイドルを目標にしてきた。
「やってやるわ」
「頑張ってね」
こうして素子の豊胸計画が実行に移された。それはその日のうちにはじまり彼女は家に帰るとすぐに運動をはじめ牛乳を激しく飲む。それだけでなくもう豆乳やキャベツを買い込んでブラまで替えてしまっていた。動きは実に迅速であった。

第三章

「いきなりどうしたの？」
お母さんはそんな素子を見て少し呆れていた。何をしているかとさえ思った。
「そんなことをして」
「ちょっとね」
お母さんには答えない。ただ気合を入れて豆乳を飲むだけである。ゴク、ゴク、と喉を鳴らして次々と飲む。お母さんはそんな娘を見て目を顰めさせるのだった。
だがふと。あることを思いそれを言う。
「ダイエットなのかい？」
「そう見える？」
「あんた最近太り気味だし」
「違うわよ」
その言葉には顔を顰めさせて否定する。
「そんなのじゃないわよ」
「じゃあ何なんだい？」
娘にそっくりな顔を怪訝なものにさせる。素子は完全に母親似なのだ。
「それじゃあ」
「まあ近いところよ」
こう述べるだけであった。
「それだけ」
「何だかわからないけれど無理はしないでおくれよ」
そんな娘に対してこう述べた。
「身体壊されたら元も子もないからね」
「わかってるわよ。豆乳飲んでるからそれは大丈夫よ」
流石に豆乳の栄養はわかっている。だからこそこう言葉を返した

のだ。
「それにダイエットじゃないし」
「そうなのかい。まあそれでも無理はしないでね」
「ええ」
笑顔で言葉を返す。しかしある意味無理はしていた。素子はその日からお昼もキャベツに牛乳か豆乳でいつもしきりに身体を動かしていた。それは高志にもわかった。
あまりにも様子が変わったので素子曰く鈍い彼も妙に思った。それで食堂でやはり特別に注文した千切りキャベツを必死に食べている素子に尋ねたのである。
「どうしたの、最近」
「何が？」
素子はキャベツを食べている顔をあげてきつねうどんを食べている高志に尋ねた。
「いや、最近さ。キャベツばかり食べているけれど」
「ちょっとね」
くすりと笑うだけであった。
「していることがあって」
「していること？」
「そうなのよ。高志君の為にね」
「僕の為っていうと」
彼もここで思ったのは素子の母親と同じであった。そうした意味では普通の考えだがそもそも素子が今していることが普通とは少し違うのでこれは外れた。
「ダイエットとかなら」
「お母さんと同じこと言うのね」
これには素子も思わず笑ってしまった。そうして言葉を返す。
「違うわ」
「違うんだ」
「ええ。けれど高志君の為よ」

こう言ってまた笑う。
「だから安心して」
「僕の為ねえ」
「多分もうちょっとしたら結果が出るから」
そしてこう告げるのだった。
「もうちょっとしたらね。それまで待って」
「何だかよくわからないけれど僕の為なんだ」
そう言われると悪い気がしないのが人情である。それは彼も同じである。
「それなら」
「待っているだけでいいから」
またキャベツを食べ出して言う。その横には当然ながら豆乳もある。
「御願いね」
「わかったよ。じゃあ期待しておいていいかな」
「是非共」
またしても笑顔を彼に向ける。
「何があってもね。あと」
「あと？」
「今日の放課後暇？」
それを彼に尋ねてきたのであった。
「どうかしら、今日は」
「まあ今日は部活もないし」
彼は陶芸部である。素子は美術部だ。二人共文科系なのである。
「時間あるけれど」
「じゃあデートしない？場所は」
「場所は？」
ここで素子は表情を変えずに頭の中であれこれと考えた。それはかなり長いようでいてほんの一瞬であった。その一瞬のうちに場所を決めたのだった。

「高志君のお家じゃ駄目かしら」
「いいけれど。けれどそれって」
「用意はしてるから」
この場合は何を用意しているのか。それを聞くのは野暮であった。
「ちゃんとね。それも買いたてよ」
「そう。じゃあいいんだね」
「ええ。そのかわりね」
ここからが彼女にとっては本題であった。それが目的なのだから。
「胸だけれど」
「胸！？」
「ええ。ずっと触って欲しいのよ」
それを彼に言うのだった。場所が場所だけにかなり小声であるが。
「御願いできるかしら」
「いいけれど」
高志は何故素子がそんなことを言うのかわからなかったがそれに頷くことにした。素子がそうしたいというのならそれに頷くだけであった。その日は放課後彼の家で始終素子の胸を触っていた。揉んだりもした。それはその日だけではなく時間があればずっとであった。そうしてそうした日が続いていた。
そんな中で。素子はまたクラスで佐代と席を挟んで向かい合って話をしていた。話す内容はやはり同じであった。
「それでどうなの？」
佐代が素子に尋ねてきた。
「効果あった？」
「ばっちりよ」
素子は右手でサムズアップを作って満面の笑顔で佐代に答えた。
「それも思ったよりずっとね」
「キャベツとかの効果かしら」
「それもあるけれど高志君も頑張ってくれたし」
やけに油の取れたツヤのある顔の述べてきた。

第四章

「だから余計にね」
「ふうん、高志君も頑張ってくれたんだ」
「そうよ、それもかなり」
ここでも満面の笑顔で述べる。
「頑張ってくれたから」
「高志君も大変ねえ」
佐代の顔は苦笑いになっていた。
「素子のせいで」
「何でそこで高志君の肩持つのよ」
素子は佐代が急に彼に肩を持ったので口を尖らせた。
「私じゃないのね」
「だって。素子が自分の胸大きくしたいからじゃない」
彼女が言うのはそこであった。
「だからよ。高志君も人がいいわね」
「その高志君の為よ」
だが素子の言い分はこうであった。
「だからよ。こうしてね」
「ふうん。高志君の為にね」
「そういうこと。全部高志君の為よ」
少しムキになってそう主張する。
「胸が大きい方が高志君だって」
「そうよねえ。やっぱり胸が大きくないとね」
これに関しては佐代も素子と同じ考えであった。否定することはなかった。
「意味がないわね」
「そういうこと。わかったわね」
素子は念を押すようにして佐代に言ってきた。

「だからよ」
「まあそれで胸は大きくなったのね」
「ええ。それもかなりね」
自信に満ちた言葉であった。
「これからもっと大きくするから。高志君の為に」
「頑張りなさい」
ここまで聞いてはこう言うしかなかった。佐代も素子の一生懸命さに惚れたのであった。
「そういうことならね」
「ええ、もっとね」
それをまた言う。
「大きくしてみせるわ。高志君の為に」
素子は誓いを胸にこう言うのだった。
「このままね」
笑顔に満ちた顔で語る素子。この話は二人だけの話だった。しかしこれは高志の耳にも入った。人の口に戸口は立てられなかった。
「そうだったんだ」
彼はその話を部室で聞いていた。今は休憩時間でゆっくりとしていた。その時に同じ部員から聞いたのである。
「素子ちゃんが」
「御前彼女の胸随分触っていたんだな」
「そこまで知ってるの？」
「内緒だぞ」
彼に話す同じ部員の山本純也はそれを言う。
「まあ俺も彼女がいるからわかるけれどな」
「いるから言えるんだね」
「そういうことさ」
彼はそれを断る。
「けれど素子ちゃんはよ」
「わかってるよ」

高志も彼が何を言いたいのかわかる。それで言葉少なく頷くのだった。
「それはね」
「御前も果報者だな」
純也はそう言って彼に笑ってみせた。
「そこまでしてもらえるなんて。普通はないぞ」
「そうだね」
しかし彼の顔は完全には喜んではいなかった。それは純也にもわかった。それで彼に声をかけるのだった。
「何だ？嬉しくないのか？」
「嬉しいよ」
一応はそう答える。
「けれど」
「けれど？何だよ」
「実は僕はね」
ここで少しその喜ばない顔を彼に見せながら述べる。
「胸は。大きいよりはね」
「小さい方がいいのかよ」
「うん。そうなんだ」
そう純也に語る。
「実はね」
「だったら今はどうなんだよ」
「複雑なんだよ」
彼はそう言って首を傾げさせた。
「胸が大きいのはそんなに好きじゃないから」
「じゃあどうするんだ？」
純也はそこを高志に問う。
「別れるつもりはないんだろう？」
「それはないよ」
これに関しては否定する。

「何でそんなことする必要があるんだよ」
「いや、それはやっぱりな」
純也は高志に対して言う。
「胸が大きくなったから。それでな」
「絶対にないよ。だってその胸は」
ここで高志は言うのであった。はっきりと。
「僕の為に大きくしたんじゃない」
「ああ」
それは紛れもない事実だった。純也もそれははっきりとわかる。
「僕の為にそこまでしてくれた人と別れるなんて。絶対に嫌だよ」
「それだけ御前が想われてるってことだからな」
「それだけじゃないよ」
彼はそこに言い加えた。
「それもあるけれどね」
「それだけじゃないのか」
純也はそれを聞いて首を傾げさせた。それが何なのかは彼にはわかりかねたのだ。
「それって何だ？」
「努力してくれたじゃない、これも僕の為に」
高志が言うのはそれであった。
「必死に。そこまでしてくれるなんて思わなかったから、僕も」
「そうだよな。普通はしないよな」
純也はそれを聞いて腕を組んだ。そうしてうん、うんと頷くのであった。

第五章

「確かにな」
「そんな人を嫌いになったら。罰が当たるさ」
こうまで言う。
「それどころか余計に好きになったよ」
「素子ちゃんっていい娘だよな」
これは純也の言葉だった。
「そこまで御前の為にしたんだから」
「その気持ちは大事にしないと」
「それだよな」
純也は今度はそれを指摘した。
「御前がそういう奴だからだよ」
「そういう奴って？」
「他人の心を汲み取れるってことだよ」
彼が今度言うのはそれであった。
「それって凄く立派なことなんだぞ」
「そうかな」
「自覚はないのかよ」
「そういうのは別に」
首を傾げさせる。どうやら本当にないらしい。
「そうか。まあそれはそれでいいさ」
「いいんだ」
「ああ。まあ俺が言うことはな」
にこりと笑った。それは高志に向けられていた。
「これからも二人で仲良くやれよ」
「うん」
高志もにこりと笑って応える。その部活の後で素子が高志のところに来た。

「一緒に帰らない？」
「素子ちゃんがよかったら」
「私は何時でもいいわ」
それが素子の返事であった。彼女に拒む理由は何もなかった。
「だって。高志君と一緒だから」
「いいんだね、それで」
「それだけでいいのよ」
そう言って彼の片手に抱きついて。さりげなくだがはっきりとその大きくなった胸をくっつけてきたのだった。高志の手にその感触が伝わる。
（まあいいか）
本当は好きではないその感触もあえて受け入れる。決して悪い気はしなかった。
（素子ちゃんの僕に対する頑張りの結果だから）
「ねえ」
それを全く知らない素子は。そのまま胸を押し付けながら高志に声をかけてきた。顔を見上げながら。
「今日はこのまま帰るの？」
「そのつもりだけれど」
といってもまだ日は高い。遊ぶ時間は充分ありそうだった。
「駄目なの？」
「私の家に寄って行かない？」
こう言ってすることは一つしかなかった。
「よかったら」
「いいの？」
「いいのよ」
そう言ってまた無意識を装って胸を押し付ける。彼女にしてみればこれで高志を自分に引き寄せているつもりなのだ。本当は何で引き付けているのか気付かずに。
「私は。けれど高志君は？」

「いいよ」
高志は明るい笑顔でそう答えた。
「僕もね」
「そうなの。よかった」
素子は彼のその言葉を聞いて満面の笑みになった。そうしてまた自分の胸を彼の片手に押し付けるのであった。やはり気付いてはいない。
「そう言ってもらって」
「それで今からだよね」
高志は今度はこう問うた。
「素子ちゃんのお家に行くの」
「ええ、今日お父さんとお母さん遅いから」
これを知ってのことである。だからこそ彼を家に誘うのだ。
「ゆっくりできるわよ」
「そうだね。それじゃあゆっくりとね」
「二人でね」
素子はそう彼に言う。彼女は今も自分の胸で彼を引き寄せていると思っていた。彼の顔を見てもやはりそう思っているのだった。
（やったわね）
それを心の中で喜ぶ。
（やっぱり男の子は胸なのね）
しかし彼女はここでも気付かない。大きな胸よりもそれを大きくさせた心こそが大事なのだと。気付かない。
気付いているのは高志だけだった。だが彼はそれをあえて言わずに。穏やかな笑顔で素子の胸の感触をその手に受けながら歩くのだった。静かに微笑みながら

胸は大きく　　完

2007.11.19

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3693d/

胸よ大きく

2010年10月8日15時27分発行